

吾妻史料集録 下卷

復刊版



群馬地域文化振興会



吾妻史料集錄

下卷

吾妻文化俱樂部



菅谷勘三郎書

懷古子集

以知己丑初姓

校堂



善導寺秘藏の猿



吾妻史料集錄 下卷

目次

- 一、天明淺間山津波實記……………富澤久兵衛編…(一)
- 一、淺間山焼出ゝ大變記……………義珍法印編…(四)
- 一、再編 吾妻記……………四 聖 編…(七)
- 一、修驗岩櫃語……………圓 聖 編…(九)
- 一、吾妻古城記……………(一七)
- 一、二 物 考……………高野長英著…(一八)
- 一、古 文 書……………(一九)

淺間山津波實記

富澤久兵衛記述

本書は天明三年に年齢五十七歳であつた原町の富澤久兵衛が、同年に際會した淺間山大噴火吾妻川筋被害甚大の状況を己れの親しく目撃したるところを基とし、之に聞込みたるところを加へて虚飾なく詳細に記述したもので誠に貴重なる資料である

原本は筆者の子孫が秘藏して居られるが、曾て東京帝國大學地震學教室に暫く借上げられたことのあるものである。此の筆者には此の外に郷土研究資料として有益なる數種の著述がある。

淺間山津波實記

富澤久兵衛 記述

天明三癸卯七月八日淺間山大燒崩押出る事神武以來大變末世子孫に咄傳度共命に限有り書に綴るはを
うぎを知らず實に我見聞候處正説を記す

目録

- 一、淺間山昔より度々燒事 卯年東え砂降北えどろ押出す事
- 二、押出し後にて面白事 不思議成る事
- 三、江戸え御注進之事 八月に成り諸色高値に成り不自由の事
- 四、村々御支配 付流家數流死人數之事
- 五、御公儀様より御手當の事 田畑御檢見にて御引被下置候事

- 六、百姓騒動之事 冬木に花の咲く事
- 七、御朱印御役人衆御出被遊田畑開發之事
- 八、十二月穀相場之事 翌春同相場之事
- 九、昔より度々飢饉にて穀留之事
- 一〇、凶年喰方之事 茶屋てんや能く賣れる事
- 一一、當凶年に穀も不買事
- 一二、帶刀御免之事
- 一三、
- 一四、ひねかて圍ひ様之事
- 一五、世の中飢を氣付事
- 一六、天明六丙午正月丙午の元日此年又凶年の事
- 一七、立石の岩荒れにて押拂無之候故此岩の譯の事
- 一八、其 他

淺間山津波前代未聞大變實說の事

一、
去る程に淺間岳は上野信濃兩國境山也東鏡に往昔源賴朝公三原野淺間野御狩被遊候頃もほや／＼焼しとなり元祿十四辛巳信州小縣郡と上州三原と山論の時御公儀様より國境墨引被仰付候に燒る所は上州分それより南麓は中山道信州追分村え四里北の麓は上州鎌原村峰迄壹里三十丁有る峰に石地藏有り鎌原に淺間大明神有り別當淺間山圓命寺同村に有り三原村々より毎年四月八日參詣に登り釜の廻り壹り餘の所を掛け念佛にて廻り六十年以前閏四月八日大に燒參詣の人夥數死る其後は閏年は決して參詣無用と言傳るほや／＼燒る事昔より晝夜無限扱又五三年の間に五度三度大燒有り其時に灰砂ふき上げ火燒上りどろ／＼雷のごとくなり燒る其音風下え三十里餘も聞える

然所に天明三年癸卯七月八日朝四ツ時燒崩押出し大變之儀前代未聞也先當四月九日燒候所十里四方にて雷電か地震かと思へば淺間に燒立燒上るそれより度々燒五月二十七日諸國に灰降る其後も度々燒灰降り草木白く成る馬の草洗てあたへ桑も洗て蚕にあたへ候へ共毎日ふり候事なれば蚕半吉也六月十八日淺間蘆田代大笹大前鎌原に小石三寸程降る其後も度々燒け灰降る事常陸國迄降る七月に成り毎日燒る信州上州相州武州越州野州常州迄灰に三寸より五六寸程の白毛降る七月六日より晝夜止むことなく燒る七日午刻より申刻迄砂降輕井澤より碓氷峠それより高崎辺迄は別て降り熊谷鴻ノ巣辺迄余程ふり萩板橋迄堅三十四五里横は七八里の所夥數砂降り七夕の辰の刻よりしんの闇になり申の刻迄はてうちんならでは隣も行けず神なりしんどうして砂に岩交り降る淺間の近所え火石降る麓の村々をたいて追分の者は家を明け七日朝岩村田迄逃出せばをたい岩村田よりも逃去候故八幡村迄逃げ人の家を借り居る二三日